

コムギ縞萎縮病（病原ウイルス：コムギ縞萎縮ウイルス）

○ 被害と発生生態

2月から3月頃、新葉にかすり状の斑点が現れ、これが黄白色の縞状となる。また、分けつが少なくなり、株全体が萎縮する。

本病はコムギのみに発生する土壌伝染性のウイルス病である。病原ウイルスは土壌中に生息するポリミキサグラミニスという菌によって媒介される。病原ウイルスと菌は、長期間にわたり土壌中に生存する。なお、土壌中のウイルスや媒介菌を根絶することは困難である。

ウイルスの感染適温は10～15℃で、12月～2月の低温により発病が促進される。4月以降、気温の上昇につれて病徴は回復する。

○ 防除方法

（ア）拡大防止対策

- ・本病は土壌伝染性の病害で、汚染土壌の移動により発生が拡大する。そのため、発生ほ場の土を他のほ場に移動させないようにする。特に発生地域外の作業を行う場合は注意する。
- ・トラクターなどの作業は、発生していないほ場を最初に行い、発病ほ場は最後に行う。
- ・作業後は機械に付着した土をよく洗い流す。

（イ）発生ほ場での対策

- ・早播きは本病の発生を助長するので、播種は11月下旬以降とする。
- ・播種量を20～30%増して茎数を確保する。
- ・連作はほ場の汚染程度を高めるので、適切な輪作に努める。
- ・多発生ほ場では「ふくさやか」へ品種転換をする。



かすり状の斑点



縞状のモザイク症状

コムギ縞萎縮病の病徴（農林61号）